

〔研究ノート〕

伊勢物語絵と季節

2005年秋号「伊勢物語の絵入り版本について」、2006年秋号「伊勢物語八橋図をめぐる」に続いて、再び伊勢物語を絵画化した作品を取り上げます。今回は伊勢物語を描く際、季節がどのように意識されているのかという点に注目したいと思います。

伊勢物語や源氏物語といった平安時代の王朝物語は、物語が成立して間もなく、主に絵巻物の形式で絵画化されるようになります。伊勢物語125段、源氏物語54帖といった長大なストーリーに沿って絵を描くにあたって、長く横に続く絵巻物の画面は相応しいものでした。数少ない平安時代の物語絵巻である「源氏物語絵巻」（国宝・徳川美術館、五島美術館蔵）や、現存する伊勢物語絵巻の中で最も古い「伊勢物語下絵梵字経」（大和文華館ほか蔵、鎌倉時代）は、今では物語の一部しか残されていませんが、もとは物語の全話が揃い、各話の印象的な場面が描かれていたものと考えられます。

その一方で中世に入ると、物語の流れとは別の観点から絵巻を編集するものが現れるようになります。こうした作例の中で最もよく見られるのが、季節の順を優先したものです。古い記録としては、藤原定家の日記である「明月記」の天福元年（1233）3月20日の条に、「夜半の寝覚め」など、10種類の物語から各月5場面を選び、12ヶ月60場面の絵巻が描かれたことが記されています。中世から近世にかけては、絵巻だけでなく、色紙・

扇面・屏風・掛軸などにも物語絵が数多く描かれるようになり、特に屏風や掛軸においては絵巻物よりも紙面が限定されることもあり、物語の場面選択に「季節」が関わる作例が増えます。物語の順とは関係なく、季節の順に代表的な場面を並べた源氏物語図屏風の作例もいくつか知られていますが、ここでは伊勢物語の例を見てみましょう。

まずは粉本ではありますが、徳川幕府の御用絵師であり、大和絵を専門とした住吉家の画稿（東京藝大蔵）には、右隻に桜の花見を題材とした伊勢物語第82段を、左隻に初夏に咲くカキツバタが登場する第9段を描き、一対で春・夏を表現した屏風の写しなどが残されており、伊勢物語の中から季節に注目した場面選択がなされていたことが窺えます。また、2005年の当館の特別展「復古大和絵師 為恭—幕末王朝恋慕—」に出品されていた岡田為恭筆「四季伊勢物語図」（図1）も、一幅の画面をすやり霞で四つに区切り、右から梅の咲く第4段西対、カキツバタの咲く第9段八橋、紅葉の美しい第23段河内越、年の暮れが舞台の第41段緑衫と、春夏秋冬の順に伊勢物語のエピソードを並べています。ここで注目されるのが、西対・八橋・緑衫は、物語本文に季節に関わる記述があるのに対し、河内越には、本文中に紅葉は登場せず、季節に関しても何も記されていないことです。では何故、第23段の河内越は「秋」の場面として選ばれたのでしょうか。

図1 岡田為恭筆 四季伊勢物語図 個人蔵
（「復古大和絵師 為恭—幕末王朝恋慕—」大和文華館2005年より転載）



そこには、河内越に登場する女性の詠んだ歌が関係するものと思われま。この女性は、ほかの女の所へ通う恋人のことを恨まず、「風吹けば沖つ白浪たつた山 夜半にや君がひとり越ゆるむ」と、物騒な龍田山を夜中に越える恋人のことを心配する歌を詠みます。この歌に出てくる龍田山は紅葉の名所として知られ、古くから龍田山について詠う和歌の多くには、紅葉が登場します。こうした印象が強いためか、為恭作品以外にも、この河内越の場面を絵画化した作品には、紅葉や秋草を描き込むものが多く残っています。和歌や名所といった他の伝統的なイメージを取り込むことによって物語に季節が付与され、より情趣ある絵画へ展開してゆく興味深い例と言えるでしょう。

第9段八橋と第87段布引の滝が描かれる大和文華館蔵の「伊勢物語屏風」（図2・3）もまた、物語絵と季節、和歌や名所のイメージとの関係を考える上で注目される作品です。落款がないため、厳密にはどちらが右隻でどちらが左隻なのか分かりませんが、八橋の場面はカキツバタの咲く初夏の光景、布引の滝の場面は紅葉が色づき、遠山が雪をかぶる晩秋の光景となっており、やはり両隻で、夏と秋という季節の対比が意識されています。

本来は六曲二双で、春夏秋冬と四つの場面が揃っていたものかもしれませんが、ここでは、ここでまた本文に注目しますと、第9段の八橋にはカキツバタが登場しますが、第87段は、布引の滝を見て感動し和歌を詠むという内容であり、紅葉も登場しなければ、季節が秋であることも記されていません。登場する和歌も滝の高

さを詠ったもので、秋の情景とは関係がありません。布引の滝を題材とした絵画作品も、山に紅葉ではなく緑葉樹を描くものがほとんどです。ただ室町時代の伊勢物語絵巻（小野家本）には、布引の滝の後方に雪の積もった山々が描かれており、この場面と雪を結びつけるイメージが何かあった可能性はあります。布引の滝も古くから和歌に詠まれる名所で、伊勢物語以外にも様々な和歌集や物語に登場します。龍田山のように特定の季節と強く結びついてはいませんが、『栄花物語』に登場する和歌に、布引の滝を白雪に例えるものがあり、こうしたイメージが寒い季節を呼び込んだのでしょうか。また、布引の滝のある津の国生田を詠んだ和歌には、やはり古くから秋の情景と結びついたものが多くあり、布引の滝の場面に季節を付与する際に何らかの影響を与えたことも考えられます。一話が短く、登場人物も状況説明も極めて少ない伊勢物語を屏風のような大画面に描くためには、単に趣向としてだけでなく、画面構成の工夫として、四季絵や名所絵のイメージを積極的に取り込み、季節の彩りを添える必要があったのではないのでしょうか。

（学芸部部員 宮崎もも）

図2 伊勢物語図屏風（八橋図） 大和文華館蔵



図3 伊勢物語図屏風（布引滝図） 大和文華館蔵



季刊 美のたより No.159

平成19年6月29日

発行 大和文華館